

第6回 府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議（概要）

1 日 時

令和3年10月18日（月）午前10時～午後0時

2 場 所

京都産業大学むすびわざ館 3-A（3階）

3 出席者

- 委員 9名（欠席1名）
- 教育委員会 橋本教育長、木上教育次長、山本教育監、大路管理部長、吉村指導部長、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、平野管理課長、村田高校教育課長、山田特別支援教育課長、坂田高校改革推進室参事 ほか

4 概 要

- 事務局からの資料説明および質疑応答
- 協議

◆：座長 ○：委員 □：教育委員会

■協議（主な意見）

- 先日、農芸高校と大江高校の視察に行った。農芸高校については、牛に取り付けた機器からデータを測定するなど、最先端の技術やICTを活用して、先進的な農業教育が行われていた。総合学科の大江高校については、多様なコースが設定され、少人数を生かした手厚い指導が行われていた。
- 実際の農業現場でも、農業機械の技術革新によって、スマート化が進んでいる。学校で最先端の技術を導入して学ばせることは重要であり、その取組をメディアやSNSを用いて情報発信していくことが大切である。多くの職業学科は府内全域から志願可能であるが、現実的に通えないということもあり、生活の基盤となる寮などの整備が必要である。

■事務局からの資料説明

■協議（主な意見）

- 大学等の進学率や高校生の留学率が全国1位であるということは、京都の強みだと思う。グローバル教育については、府立高校の在り方を考える上で、非常に強みを発揮できる分野であると認識している。国際バカロレアの導入については、公立校での公平性や平等性などの観点で、府立高校全体に広げるということは難しいのではないかと考える。府立高校全体としては、探究学習におけるグローバル化といった観点を中心に検討すべきであると思う。例えば、グローバルイシュー（地球規模の課題）を探究のテーマとして積極的に取り上げていくことが

考えられる。他府県では、毎年「台湾」をテーマに国際教育をしている学校があり、現地の高校生との交流やインターンシップなどをしながら探究活動を進めている。現代ではオンラインでの交流も可能であり、実際に現地を訪問することとオンラインとを組み合わせ、「探究活動×グローバル」という取組を積極的に進めるべきであると思う。現状は、各府立高校が独自に協力校や提携校を持っていると思うが、府立高校全体としての連携やコンソーシアム化を図るということも検討できるのではないか。また、高大連携によるグローバルイシューへの取組も考えられる。現在、大学教育の先取り履修や、大学教員が高校生を教える、「スマートAP (Advanced Program)」といった検討が進められている。府立高校が個別に大学とマッチングしていくことは難しいので、府教委において拡大していくことも考えられるのではないか。そうすれば、特定の高校や特定の教員にかかっている負担が、軽減できると思う。

- かつての学校教育では、小・中・高を通して、比較的幅広く国語・算数・理科・社会を学習していたように感じる。その頃に比べると、今は文系・理系に分かれ、特化した学びであるような気がしている。学びが偏ったことで時間に余裕が生まれ、自分に必要な学習の時間にあてている生徒がいる一方で、ゲーム等に時間を費やしている生徒も生じてきたと思う。
- 「STEM教育」に「Art」が加わったものが「STEAM教育」であるが、企業においても、この「Art」は重要視をされている。企業人としては、国語・算数・理科・社会だけではなく、芸術なども必要な要素であると言われている。物事をどう俯瞰的に、複眼的に見るか、そういう力をつけておかなければ、今後の予測不可能な社会においては対応できないことを示唆しているのだと思う。また、実社会で求められるのは、「課題形成力」である。何が課題なのかということ、いろいろな情報を集めて、自分で設定していく力というのは、極めて重要である。探究学習はその要素を含んでおり、今後特に力を入れていくべきである。
- 現代の日本の教育は、非常に総合的で、時間をかけて様々な内容を学習するように感じている。世界に目を向けると、そのような教育ばかりではないと思う。特定の分野などに特化したカリキュラム、自分の才能への気づきを与える教育というのがあってもよいという気がする。
- 国際バカロレアについて、他府県では様々な課題をクリアして、公立高校で導入している例もある。公立校における公平性という視点はもちろんあるが、一方で、課題を抱えた生徒に必要な支援をする高校や、グローバル社会を牽引するリーダーを育てる高校など、様々なニーズに応える学校の役割やスタイルの多様さが必要であると思う。留学率が日本一という土壌がある京都府で、国際バカロレアの教育を1つの選択肢として考えていくことは、必要なことではないかと感じる。
- グローバル人材の育成に関しては、「府立高校特色化推進プラン」において、これまでから生徒の個性や能力を最大限に伸ばすための教育が実践されている。「グローバルネットワーク京都」の学校では、国際交流や英語によるプレゼンテーション、交流会などを行い、グローバルな資質能力の育成を行っている。国際バカロレアについては、財源の課題もあるが、個性や能力を最大限に伸ばすための選択肢としては、あってもよいと思っている。

- 各府立高校が、大学や企業等と幅広く連携していると認識している。たとえば、地元京都の大学の教員に来てもらい、英語で講義をしてもらったり、研修旅行先のシンガポールの大学教員に講義をしてもらったりという取組もある。府立高校間の連携を深めることで、ICTを活用して遠隔授業で他校の生徒たちも受講できるように、取組を拡大していくことも考えられる。府立高校の持つ幅広い教育の資源を活用しながら、学校の枠を越えて学びの選択肢を増やしていくことができると思う。そのようにして、府立高校のスケールメリットを活かすということが、府立高校全体の魅力化に繋がると思う。
- 社会のグローバル化によって、教育現場でもそうした視点が必要だということが言われ、実際に府立高校でも、何年も前からグローバルな視点を持った教育が進められていると思う。実際に高校で行われている取組や、そうした学習を受けた生徒が卒業後に大学や社会でどのような活躍をしているのかまでが、中学生にも伝わるということが重要であると思う。探究活動やICTの活用などを通して、高校と中学校が繋がる連携の工夫ができればと思う。
- 目的意識や興味関心を持って、職業学科の体験学習に参加している中学生もいる。京都の伝統・地域産業などに府立高校が取り組んでいることや、専門性・技術力などが発信をされ、職業学科の魅力が伝わる機会が増えれば、中学生にとって進路選択の材料が増えることになると思う。
- 大学などの高等教育機関とより密接な連携をしていくことや、社会の変化に伴ってグローバル人材を育成していくことの重要性については、誰も異論はないと考える。高大連携を進めるには、高校と大学が連携していく目的は何か、生徒がどういう力を身につけられるのかということ、明確にする必要がある。そこでベクトルがずれていると、うまくいかないと思う。大学で探究活動を進めていくことには大きな意義があると思うが、そのために高校時代にどのような力をつけておくべきなのかということは示さなければならないと思う。また、ICTを活用したオンライン等による連携の仕方についても、検討事項かと思う。
- 府立高校には、自分の興味・関心に応じて学べる学校や、高度な知識を得られる学校が多くあると思う。そうした府立高校の特徴が、小・中学生にしっかりと伝わり、視野が広がるような広報活動が重要であると思う。そうした取組を通じて、保護者等にも幅広く知ってもらうことが必要ではないかと思う。
- グローバル化が進むこれからの社会では、他者を尊重すると同時に、自分自身も尊重して、自分ができることをプレゼンテーションできる力が問われると思う。AIが進歩する中、言われたことをやるだけではなく、自分なりにプログラミングし、発信できる人材が求められていると思う。そのためには、様々な場面で、子どもたちが自分自身で意志決定を行う機会を設定することが必要だと考えている。IT分野の関係者の話で、これからの社会は異端児と言われる子どもの方が生きていけるという考え方を聞き、時代の変化に応じた力を身につけていくことの必要性を感じた。

◆産業が地域社会を支えていることや、府立高校生の就職率が1割程度あるということを考えると、職業教育については一定の意義がある。時代の変化に応じた取組の1つとして、最先端のノウハウを学校での職業教育に取り入れていくことで、魅力化を図っていくことができる。また、中学生からのキャリア開発の視点での重要性も高いと思う。

◆グローバルな視点を持った人材の育成は当然必要である。単に外国のことを理解している、語学ができるということではなく、課題発見・課題解決といったことがグローバルな視野を持つてできなければならない。そのためには、文理の壁を越えた「STEAM教育」は欠かせない。グローバルな 이슈を取り上げた探究活動や、京都の強みである数多くある大学との連携についても非常に有効である。国際バカロレアについてはいろいろな意見が出たが、今の段階で切り捨てるのではなく、選択肢の1つとして検討・研究してもよいのではないかという話であった。

■事務局からの資料説明

■質疑応答

◆通信制課程の在籍生徒数は、公立では減少傾向であるが、私立では増加している。何か特別な理由などはあるか。

□全国的な状況であり、京都府も同様と認識している。オンラインも含めて、通信制課程での学び方が多様化していることや、様々な専門分野の授業が受けられるなど、メニューが充実しているということがあると思う。小・中学校での不登校経験のある生徒が増えている中で、通信制課程に魅力を感じて選択しているということもあるかと感じている。

○特別支援学校を卒業時した際には、高等学校を卒業したことになるのか。

□特別支援学校の高等部を卒業した場合には、高等学校を卒業したとはならない。

○清明高校では生徒数が増えているが、特定の支援を必要とする生徒も在籍しているのか。

□清明高校は平成27年度に設置し、毎年度1学年120名を定員として募集をしている。入学者選抜を行い、生徒は選抜に合格して入学しているが、特別な支援を要する生徒なども在籍をしているという現状がある。

■協議（主な意見）

○夜間定時制高校の趣旨としては、昼間勤労する者が、勤労が終わった後の夜間を教育の時間に充てるという原則だったが、今は状況が変わってきている。夜間に学習する必然性が無いの

に、夜間定時制に通う生徒もいる。定時制高校は働く青少年の学習機会を保障する場ではあるが、今ではそれに加えて学びの多様性や多様な学習ニーズというキーワードでも表される。中学校で不登校経験のある生徒、特別な支援を要する生徒、全日制から進路変更してきた生徒、家庭の経済的な理由がある生徒など、多様な背景のある生徒が学んでいるのが現在の定時制高校だと思う。フレックス学園構想に基づく清明高校・清新高校の昼間定時制は、まさにそうした現在の多様なニーズに応える画期的なシステムだと思う。

- 生徒数は少ないが、北部地域でも子どもたちの多様なニーズがあるということは、南部地域との差はないはずである。そのニーズに応えられるように、例えば中丹地域においても、夜間定時制を多部制化して昼間の学習を希望する生徒にも対応できるようにすることや、新たなフレックス高校を設置することなどを検討していくことも必要であると思う。「GAF A」と呼ばれる巨大な4つの企業は、人間の多様性に注目して大きく成長したと言われている。教育において子どもたちの多様性にどう対応していくのか、しっかりと考えなければいけないと思っている。
- 生徒の多様なニーズに応える学校が増えてきていることは評価できることだと思う。定時制や通信制では昔とは異なり、何らかの理由で全日制での学びが困難な生徒が希望している実態がある。また、特別な支援を要する生徒においては、個々の実態が異なる。府内の地域の実情を踏まえながら、柔軟な学びができる学校を拡大していくことで、各地域で多様なニーズに応えることができるのではないかと考えている。
- 京都府では、特別な支援を要する子どもたちに対して、それぞれの実態に応じて丁寧に対応してくれるという思いがある。高等学校段階で、定時制高校やフレックス高校、特別支援学校など、様々な選択ができるというのは、京都府の教育のきめ細やかさだと感じた。しかし、小・中学校段階では、特別支援学校か特別支援学級といった選択になると思う。特別支援学校では、専門的な環境という安心感があるが、小・中学部で9年間学んだ生徒の次の高校段階での選択肢は、ある程度限定されてくるのではないかと考える。特別支援学校の高等部という選択をすると高等学校を卒業したこととは異なるため、卒業後に就職などで社会に出ていく時のことも見据えた選択が重要である。特別な支援を要する生徒が、特別支援学校において障害の実態に応じて高等学校と同じ学びが得られるようなクラスや、高校において特別支援教育によった環境の中で安定して学習できる環境が、必要ではないかと感じた。
- 全国的に不登校の子どもたちが増加しているが、昼間に仕事をしているから夜間定時制に通うという目的ではなく、不登校の経験があっても学校に通うことに挑戦して夜間定時制を選択している生徒がいるということを感じた。また、ひとり親家庭も増加しており、経済的に家庭を支えるために働きながら学んでいる生徒がいることも見受けられた。フレックス高校では、午前コース・午後コースがあるなど、ゆっくり学べる環境が整えられている。高等学校でこのような学びを行いながら、部活動や、大学進学に向けた学習に取り組むことができることは、素晴らしいと思う。小・中学校段階から不登校の子どもたちが増えており、このような学校が今後も必要であると感じた。

- 中学校のスクールカウンセラーが、定時制や通信制高校の情報を必要とされている場合がある。不登校傾向の生徒が高校入学をきっかけに不登校を克服するといったことがあるので、定時制・通信制の情報を必要とされるということであった。ただ一方で、そうした生徒が、本当に望んでいるのは昼間の高校だとも言われていた。定時制・通信制での学びに加えて、全日制の中で義務教育段階の学び直しができるシステムを持った高校が必要であると感じている。学び直しながら、高校段階で求められる力や社会人としてのマナーなどを身につけて卒業していける高校があればよいと思う。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどと、教職員が連携できる体制を構築していくことが重要であると感じている。

- 他府県には、知的障害のある生徒を対象としたコースを置いている高校がある。そのコースに通う生徒は、他の生徒と同じく高等学校の卒業となる。一方で、特別支援学校に在籍しながら、特別支援学校に通うのは週1回で、残りの4日間は高校の制服を着て高校に通って学習するというシステムもある。生徒・保護者が選択可能なインクルーシブ教育の場となっている。そのような学校では、知的障害のある生徒から他の障害の無い生徒が学んでいることもある。障害のある生徒が頑張っている姿を見て、自分も様々な背景があるけど頑張ろうという意識を持ち、障害のある生徒と無い生徒との繋がりが生まれて、互いに力づけられたりしている。知的障害のある生徒への個別の支援体制や、その集団の中で指導・支援していく仕組みというのは、発達障害や様々な家庭的背景のある生徒にも同じように対応できるものになってくる。学校現場においては、気になる生徒をピックアップし、指導・支援する体制などを様々な教育活動の中に位置づけていくことで、結果として当該生徒だけではなく、周りの生徒も支えられているということがある。障害のある生徒と無い生徒とが一緒に学ぶことの意義といったことを、新しい仕組みとして反映することが考えられる。特別支援学校では、卒業後を見据えて、職業的なスキルを身につけるために教育を行っているということもあり、それも踏まえて、生徒や保護者にとっての多様な選択肢を検討していくことも必要であると思う。

- 30年程度前の夜間定時制は、勤労しながら学習している生徒が大半であった。しかしその後、時代の変化とともに定時制の役割も変化してきて、今は多様な生徒が学んでいる状況となっている。ある府立高校の昼間定時制では、不登校経験を持つ生徒や、特別な支援を要する生徒、全日制高校から進路変更した生徒が、多く在籍しているという状況である。現在、定時制課程においてそのような多様な生徒に対応する必要があるということを考えると、人的配置などにおいて、学校体制が十分であるとは言いにくいと思う。京都フレックス構想に基づく高校2校においては、ニーズは本当に高く、一定の志願を維持し続けている状況である。一方、全日制の府立高校では、年々定員未充足が拡大していることも要因として、様々な支援が必要など、多様な生徒が入学している実態がある。そうした生徒に対して学校体制が対応しきれないことも考えられる。現状を踏まえると、今後柔軟な教育システムを考えていく上で、不登校経験のある生徒に対応できる学校や、特別な支援を要する生徒に対応できる学校など、多様化する生徒のニーズに丁寧にかつ柔軟に対応できる学校を考えていく必要があるのではないかと思う。また、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーなどの、教育相談や支援に関わる人的措置の充実や、外部関係機関との連携体制の整備なども必要であると思う。

- 全日制に関わる議論ではコンテンツの話であったが、通信制・定時制や特別支援教育の議論では受け入れ先のような話になっていることに違和感をもった。多様な生徒がそれぞれ学校を選択していく中で、その学校で何を学んでもらうのか、ということに焦点を移して検討していかなければならないと思った。
- 特別な支援を要する生徒が企業に就職する場合には、学校で教職員がいかに関与して支援してきたか、就職後も関わりを持っているかということが重要になってくると思う。それぞれの生徒の実態が異なるので、卒業後数年間の状況について、学校側と企業側とが連携してフォローアップしていく必要がある。
- 生徒の実態からすると、スクールカウンセラーの配置数が十分ではないと感じており、今後特に充実させていくべきであると思う。
- ◆定時制・通信制といった従来からの枠にはまるのではなく、生徒たちのニーズ・状況に応じて府立高校の在り方を考えていくべきである。また、生徒たちが身につけるべき資質能力をベースに置きながら検討していく必要がある。高校の全日制・定時制・通信制だけにとどまらず、高校と特別支援学校との関係についても考える必要がある。他府県では、いわゆる学び直しを目的としたエンパワーメントスクールという学校や、特別支援学校と高校が連携する自立支援校・共生推進校といった学校づくりを行っている事例もある。高校と特別支援学校の関係性についても、新しいアイデアを検討していく必要があると思う。
- 現在、様々な生徒が在籍する状況で、フレックス高校をはじめ、非常に多様な対応を京都府教育委員会が用意しており、現場の先生方の熱心な対応に頭が下がる思いである。私立高校とは違い、公立高校には福祉的な使命があると思う。
- これまでは「昼に働き、夜に学ぶ」という定時制のイメージであったが、最近は、中学生のときに不登校で定時制の高校に入学したが昼間に働いているわけではない、という生徒たちへの新しい対応の必要性が高まっている。定時制や通信制の中退率は、全日制よりも高い傾向にあると思う。ミスマッチによる進路変更の実態は、高校中退の定量的な数値結果からだけではわからないので、その実態に注目していくべきだと思っている。多様な生徒たちに対する支援というものが十分なのかどうかという実感である。
- 生徒の家庭の状況まで、高校が十分に把握できていないということが起きている。小学校・中学校を所管している市町村と、府が所管する高校の間で、生徒に関わる移行や支援の輪が途切れてしまっているということも生じている。そのため、基礎自治体との連携を強化し、教育的な支援とともに福祉的な支援が切れないようにしないといけない。スクールソーシャルワーカーだけでなく、NPOなど中間支援的な団体とも連携をしていくことが重要であると思う。
- 通信制課程は、これまでは全日制での学びがマッチングしなかった生徒が望むことが多かった

が、最近では、ゆっくり学びたい、自由に学びたい、自由に生きたいと考える子どもたちが、第1志望として選ぶということが増えてきていると思う。コロナ禍による影響で非常に加速化したこともあると思うが、これまでの通信制課程の機能や役割だけでよいのかということ、京都府教育委員会として改めて検討する余地があると思う。通信制課程における魅力の1つとして、新しい選択肢を検討すべきではないか。

- ◆本日までの6回の会議で、予め設定していたすべての協議事項について一通り御意見をいただいた。なお、補足や追加等の意見がある場合には、事務局まで連絡願いたい。これまでの協議を参考に、府教委としてビジョンの中間案の素案を作成していただけたらと思う。次回の会議では、その内容について皆さんに御協議いただく。